2026/10/03

岩舟川と古津川の違い

長良郷土史クラブ　酒井　寛　（中川原 在）

そもそも、「徳山ダムの“余り水”を、なぜ長大な導水路を築いて木曽川に落とし、更にその途中で長良川に落とすのか？」への疑問は尽きないが、その話は、別の機会にし、「長良川に落とす際、古津川を介する、あるいは岩舟川を介する」との２つの案があるようだが、本日は、その２つの案の川の違いについて説明したい。

始めに…

6月20日に「北部コミセン」で開かれた「徳山ダム導水路学習会」の席で、酒井は「古津川は、地山の凹部を流れる川で基盤は頑丈、しかし岩舟川は、軟弱な扇状地の上に掘られた天井川で、越水・破堤の危険性は高い」旨の話を切り出した。しかし、古津川にしろ岩舟川にしろ、極めてマイナーな川であり、それを知らない人には実感が伴なわないことから、「岩舟川の現地見学会を」の声となり、9月5日に長良公民館で持たれた会で、10月3日（土）の現地見学会が決まった。その案内役を、「地元民」ってことで、中川原在住の酒井が受け持つこととなった。もとより地質等の専門家ではないが、精一杯に説明したいと思う。

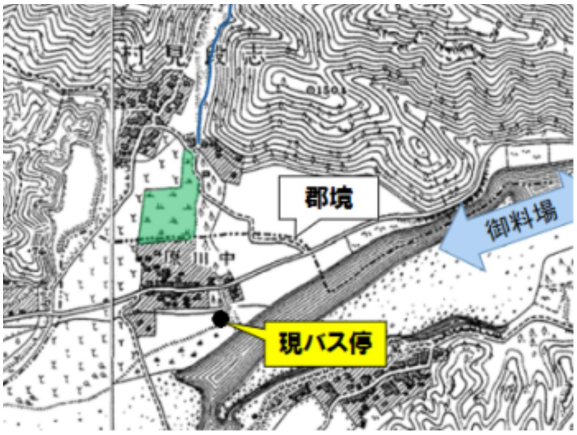
古津川の特長

古津川は、千鳥橋の下流約500mの右岸 喫茶「ロキシー」のあるT字路の下で長良川に注ぎ込んでいる。もっとも古津川のどこに徳山ダムの水を落とすのかは分からないが、この「ロキシー」のそばの古津川をさかのぼり、小島山トンネルと大倉山トンネルの間の「信号」を突っ切って入り込んだ「坊が洞」のどこかに導水路の開口部を作り、この「古津川」を介して長良川に合流させるのであろう。この古津川周辺の基盤は、縄文人が「火打ち石」や「鏃（やじり）」にも使った極めて硬い「チャート」と呼ばれる岩石で、金華山をはじめ、この周辺の高い山は全てこのチャートで出来ており、風化や浸食には極めて強い岩石と言える。古津川は、そんなチャートで出来た東の大倉山と、西の小島山の間を南流して喫茶・ロキシーの西で長良川に合流する。従って古津川の特長を簡潔に言えば、「硬い岩石から成る大倉山と小島山に挟まれた間を流れている」ことから、その流路は頑丈で，極めて安定していると言える。



岩舟川の特長

一方、「岩舟川」の方は、ちょっと様相が異なる。それを明治24年測図の「陸地測量部編纂の地形図」で説明しよう。図の中川原は「厚見郡日野村字中川原」で、北の山べりの志段見は、方県郡志段見村である。よくよく視ると中川原と志段見との間に二点鎖線の「郡境」があり、その郡境は、上流の「御料場」では長良川の真ん中にあるが、すぐ下流でいきなり北



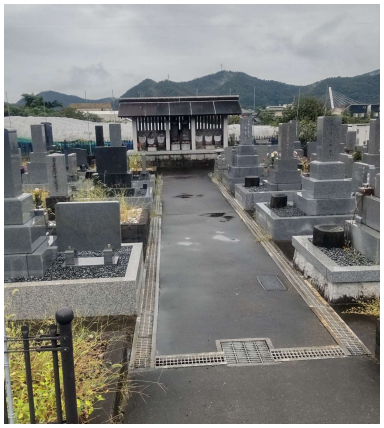
に振れ、中川原と志段見の間を西に流れ（緑色で示した水田の南限に沿って西に進み）、雄総の山にぶつかって南に曲がり、今は無い「久官藪」に沿って南西に延びている。一般に平野部の「郡境」は、普通は「大河」がその役を担っているが、ここの郡境は、畑の中にいきなり存在する。それは、昔日の川だったからである。

昔日の川を推理する

下の写真では、あえて「郡境」を示さなかった。と言うのも、郡境の位置を推理して欲しいからである。

ヒント①「お墓の阿弥陀如来の向き」：写真には、「中川原墓地」と「志段見墓地」が映っていて、多くの墓地では一番奥に阿弥陀如来と観音菩薩の2体の石像が並んで立っている。数年前、古津で墓地の移転が為された際に、この阿弥陀如来・観音菩薩の向きに悩まれ、近隣の墓地を調べられた。ところが中川原では2体は南向きに立っているが、志段見や雄総・堀田では北向きに立っているため、大いに悩まれたとの話を聞いたことがある。この疑問を解くカギは「川」である。川は現世と常世を分ける境界で、川の向こう側は「死者の世界」であり、阿弥陀如来は川を背にして集落の方を向いて立ち、「これより先は、死者の世界である」という「結界」を示している。言い換えれば、中川原では墓地の北側が死者の世界（川）だが、志段見・雄総・堀田では墓地の南側が死者の世界（川）だったのである。と言うことは、中川原墓地と志段見墓地の間を川が流れていたことになる（2つの墓の間隔は約165m、この幅は決して本流では無い）。





ー志段見では墓の南が川ー ここに川があった時には、二つの墓地の中間が「郡境」だったと思われるが、長良川が現在と同様に中川原の南側に移ると、岩舟川が上流から運んでくる土砂は，下流に運ばれること無く、そこにどんどん溜まり続け、その結果、右岸の志段見側の「古市場」が次第に南に広がり、遂には中川原と陸続きになってしまったと思われる（郡境は，初めは川の中間にあったが、志段見の字古市場の拡大に伴い南岸に移動した）。

ヒント②「古市場」「川畑」の字名：記録としては何も残っていないが、字名「古市場」は古い時代にここを流れていた川を挟んで方県郡と厚見郡の間の市場があったのだろう。更に古市場の西側の字名が，今は川も無くなっているが、その名も「川畑」である。

ヒント③「山之神の石碑」：旧日野村を始め、旧各務郡の岩村から芥見村、更には旧山県郡の加野村・岩井村などには元服前の少年たちが五穀豊穣と無病息災・家内安全を祈願する祭りの「山之神（ヤマノコ）」があって、その祭場には「山の神」を示す石碑が建っていた。「山が無い中川原」でも、稔りをもたらす山神に秋の稔りを感謝しての「山之神」の行事を営々と続けて来たが、その「山之神の石碑」は、郡境に接して南側（旧日野村側）に建っている。これも現世と「ものの怪の世界」との結界での祭場だった（何百年と続いてきた中川原の山之神も、コロナ禍で3年休止する中で、つい先年、その歴史を閉じた）。

ヒント④「雄日ヶ丘公園」：中川原と雄総との間にある「雄日（ゆうひ）ヶ丘公園」、普通「ゆうひ」の表記に「雄日」とは書かない。あえて「雄日」と書いて「ゆうひ」としたのは、この公園が「旧雄総村」と「旧日野村中川原」にまたがっていることから、「雄」と「日」を採って無理矢理「雄日（ゆうひ）」としたのである（60年経つが、なかなか定着しない）。ついでに申し添えるが、この公園、秋には銀杏で黄色に染まるのは、堤防から山まで至る60m×270m の区画を「防火帯」として、あえて難燃性の銀杏を植えたからである。公

園の東にある幅2mほどの水路が、かつての厚見郡と方県郡の郡境だった川の痕跡で、それも途中で暗渠に入るが、公園の真ん中を流れ、昔の「チオペペ」という喫茶店の前で堤防をくぐり、長良川に排出される。もっとも今は、雄日ヶ丘公園の真ん中あたりから暗渠になって西に流れ、雄総輪中の西端、岐阜市の川北の水源池近くの「雄総排水機場」から長良川に排出される。



昔日の川は

以上、「昔日の川を推理する四つにヒント」を示したが、昔日の川は描けたでしょうか？　正解は右図で示した。もっとも「阿弥陀如来や観音菩薩の建っている向き」の所で述べたように、中川原墓地の阿弥陀様と志段見墓地の阿弥陀様の間は、約165mしかない。「川幅が165mポッキリ」というのは決して本流では無い。その証拠に、十年ほど前に雄日ヶ丘公園の南のグランドに「耐震の防火水槽」を作るために5mほどの深さの穴を掘ったが、大きな礫でも数センチしかなく、大部分は5mm～10mmほどの砂であった。もっとも、そんな「小川」を、どうして郡境にしたのかは不明である。

「岩舟川は「甚だしく砂石をを押しだす渓」だった

岩舟川上流の「百々ヶ峰」は、標高417.9mあって、岐阜市の最高峰である。この山塊の基盤は，非常に硬いチャートであり、基本的に「風化や浸食に強い」ものである。

濃陽志略と デ・レーケ

ところが宝暦6(1756)年に尾張藩士の松平君山によって編まれた**「濃陽志略」**に依れば、「岩船山の渓流、長良川にまっすぐに落つ。甚だしく砂石を押しだす渓にて、その砂石、川の半ばまで及べり」と、岩舟川の荒廃のすごさを書き残している。その120年後の1878（明治11）年に「木曽三川下流域の実地踏査」に入った「お雇い外国人」のヨハネス・デ・レーケは、その調査行の最後の3月5日に岐阜の宿から古津までを調査した際に、この「岩舟川」を越えている。そして3日後に大阪に戻ったデ・レーケは、4月6日に石井土木局長に「木曽川修築の順序は、長良川及び揖斐川の節度（対策）を第一とす」「施工順は山地の砂防を先行させ、その後に本川の改修を行うものとす」と上申し、更に翌1879（明治12）年11月26日に岩船山、翌27日に各務原市と関市の境の権現山に登り、「山林の伐採が私有林のみならず官有林にも及び、このまま放置すれば，木曽川改修は良い結果を得られない」として、山林の規制と砂防の緊急施行の必要性を意見書『木曽川流域岐阜以北山林の件』にまとめ、「過剰伐採の危険性」を訴えたのである。



デ・レーケが前年に続いて明治12年に岩舟川上流に入ったのは、古津への途中で岩舟川を越えたときに、「濃陽志略」に書かれた「甚だしく砂石を押しだす渓にて、その砂石、川の半ばまで及べり」を見たからであろう。その時の岩舟川の状況は分からないが、デ・レーケの工事から約60年後の1950年代の筆者の子ども時代の中川原の景観は、左のようであった。まだ日野の渡船が立派に機能していた時代である。河原の石は、白い円礫が主体であったが、そこに岩舟川からチャートの茶色の角礫が押しだされて図のように広がっていた。『濃陽志略』の言う、「その砂石、川の半ばまで及べり」という状況だった。しかし、岩舟の渓も、明治10年代にデ・レーケの教えを受けた内務省の技手：江平幸造（えひらこうぞう）の監督の下に砂防工事が進められ、その効果が如実に現れて、「土砂の吐き出しが止まったのである。

「掘割（ほりわり）」と呼ばれた岩舟川

「中川原墓地」の近くの岩舟川に一本の人道橋が架かっていて、橋の銘板には「掘割橋」と刻まれている。今はこの涸れ川を「岩舟川」と呼ぶが、半世紀前までの中川原では、誰もが「掘割（ほりわり）」と呼び、「岩舟川」という語を聞いた覚えが無いほどである。「掘り割り」とは何か？ まさに『濃陽志略』で「甚だしく砂石を押しだす渓」と言われた岩舟川、大雨の後には、上流から大量の土砂が運ばれてきて渓を埋める…それを放置すれば次の大雨で濁流が堤防を越えて畑や人家を押し流す。そのため、大雨がやめば、中川原では村民が総出で岩舟川に入り、堆積した土砂を掘り割るという共同作業が必要だったのである。





もっとも、岩舟川を直線状に真南に流すと、すでにあった人家にぶつかるので、流路を少し上流側に湾曲させながらの浚渫作業であった。こうして岩舟川は次第に「天井川化」を進めていったのである。

天井川化が耕作放棄地に

明治２４年測図の「参謀本部地形図」には、中川原墓地の北側の「古市場」には、水田が広がっていた。ここは岩舟扇状地の上だから、基本的には稲作には適しない土地である。しかし上流に貯水池を築き（今の松尾池）、800mに亘って用水を敷設した結果、「水漏れの激しさ」はあったが、1980年代までは営々と稲作が続けられていた。しかし、天井川化した影響で道は狭いし急傾斜地のために耕作機械が入らず、耕作者の高齢化もあって、かつての水田は徐々に「耕作放棄」され、次第に笹原・原野に戻りつつあり、つい先年までは中川原墓地から165m先の志段見墓地が見えたが、もう木々が繁茂して見通しが利かなくなっている。

岩舟川の荒廃は美濃の悲劇

それにしても「岩舟川は、どうしてそんなに荒れたのか？」が疑問として浮かぶが、百々ヶ峰山頂から長良川までわずか２ｋｍそこそこしか無いが、百々ヶ峰山塊は真福寺村に属して尾張藩領、松尾池周辺は雄総村で旗本の青木領、その下流が志段見村で尾張藩家老の石河領、そして中川原が尾張藩領という具合で、たった２ｋｍの小川なのに、４人の領主が介在しており、しかも真福寺村・雄総村・志段見村で樹木の過剰伐採が為されて山や谷が荒れたとしても、水系が異なっているために真福寺村や雄総村・志段見村に水害等が及ぶわけでは無いのであった。そのため、とことん、収奪が続けられたために、さすが風化や浸食に強いチャートでも、急激に荒廃が進み、大雨の度に土砂を吐き出し、扇状地を形成し続けたのである。４人の領主が介在していることで、争いごとも岐阜奉行所や笠松郡代で済む案件もあるが、相手によっては江戸の評定所に出向かねばならぬものもあり、時に「泣き寝入り」も求められたり…まさに「分割統治の悲劇」そのものが岩舟川にも被さっていたのだ。

岩舟川の工事

「古津川」は、地山の凹部に出来た川で、安定していると思えるが、「岩舟川」の方は、『砂上の楼閣』とは、ちょっと言い過ぎかも知れないが、砂の上に貯まった扇状地を掘り割った天井川であり、つい先年も「堤体の漏水防止の工事」を済ませたばかり。今でも大雨の時にはドードーと轟音を立てて川幅一杯になって流れているのに、そこに新たに「徳山ダムの余り水を流す」となれば、大丈夫かよ？　との不安がよぎるのも当然です。